心的概念の不確実性の問題

—— ウィトゲンシュタインの「心理学の哲学」の観点から ——

谷 田 雄 毅*

On Uncertainty of Mental Concepts:
From the Viewpoint of Wittgenstein's Philosophy of Psychology

Yuuki TANIDA*

Abstract

In this paper, we discuss an uncertainty of mental concepts. In the application of mental concepts, we often face disagreement. For example, observing a behavior, some person judges he/she is sad, but others do not. Surprisingly, in his *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, Wittgenstein says that there is an uncertainty of criteria in the mental concepts. In other words, he thinks disagreement in judgements about other's mental state originates from conceptual dimension rather than empirical dimension. (e.g., differences in context and information quantity) The goal of our study is to clarify why mental concepts have this kind of uncertainty.

1. 導入

本稿では、晩年のウィトゲンシュタインが論じた（確実性の問題ではなく）不確実性の問題を扱う。『確実性の問題（*On Certainty*）』とほぼ同時代のテキストである『ラスト・ライティングス（*Last Writings on the Philosophy of Psychology I, II*）』においてウィトゲンシュタインは、知覚や感覚、痛み、感情、アスペクトなど心まつわるありとあらゆる概念の文法について探究を重ねている。そしてそのテキストの随所において、心的概念を用いてプレイされるゲームには、ルールの一部として不確実性が組み込まれていることが示唆されている。本稿が論じる不確実性の問題とは、ウィトゲンシュタインが「心理学の哲学」の文脈で論じた、心的概念の適用に関わるものである。

例えば、誰かの振る舞いを観察してその人の心の状態について判断を下す際、本当は当人がどのように感

じているか分からないという不確実性がつねにつきまといっているように見える。あるいは、振る舞いから判断される心のありようについて、観察者同士で意見がわかれることも往々にして生じる。こうした不確実性はしばしば、観察者と被観察者、ないし観察者同士がもつ経験的な情報量のギャップに起因するものとしてみなされがちである。

だがウィトゲンシュタインは、その不確実性は、はじめから心的概念のうちに埋め込まれているのだと主張する。つまりその不確実性は、情報量のギャップを埋めることで解消される類のものではなく、心的概念を用いる以上避けることのできない不確実性だと言うのである。本稿ではこれを「心的概念の不確実性の問題」と呼ぶことにしたい。本稿の課題は、心的概念がこの意味での不確実性を避けられないのはなぜなのかを明らかにし、概念に内在する不確実性という観点から、心的概念を使ったゲームとそうでないゲームとのあいだにあるルールデザインの差異を理解することにある。

本稿の流れは以下のとおりである。まず2節において、概念の不確実性の問題圏の設定と以降の議論のた

* 東京大学人文社会系研究科博士課程

E-mail: yuuki_tanida0519@yahoo.co.jp

有益なコメントを下された二名の匿名査読者および、佐藤暁氏、大谷弘氏に感謝申し上げます。

めの準備作業を行ったのち、3節において心的概念の不確実性の問題について論じる。3節では、まず、心電図のモニタリングの比喻を通じて、振る舞いが規則的であるときと不規則なときとで、形成されてくる概念の性格にどのような違いが生じるかを見る(3.1)。ついで、概念が心的と呼ばれるに値するためには、振る舞いの不規則性が前提となることを示す(3.2)。結論として、心的概念が不確実性を織り込んで設計されざるを得ないこと、それゆえ、心的概念を用いたゲームにおいて生じる判断の不一致は、心的概念が健全に運用されている証左と見なされるべきで、解消が目指されるべきものではないことを主張する(3.3)。

2. 概念の不確実性とはどのような問題か

はじめに、本稿が焦点を合わせる概念の不確実性¹の問題圏を設定するため、二種類の判断の言語ゲームを導入することにしよう。いま着目したいのは「判断の不一致が生じたときのわれわれの反応の仕方」である。Bloor (1983) は、変則例 (abnormal) や他所者 (outsider) への対処パターンが有限であることに注目し、その対処パターンに応じて、言語ゲームに類型化を与えることができると論じている²。例えば、われわれは、変則例に対峙したとき「無視」や「無関心」によって応

じることもあれば、それを脅威とみなして「排除」や「拒否」へと向かうこともあるだろう。また、より複雑な反応としては、変則例に見えるものを変形しノーマルな事例に「同化」するといったものや、ノーマルな事例を拡張して変則例を「包摂」するというものもありうる。われわれもブルアにならいつつ³、議論の単純化のために「排除」と「寛容の態度」という両極端の反応によって特徴づけられるような二種類の言語ゲームに焦点を合わせることにしよう⁴。

異なる判断を下す者に対して「排除」でもって応じられる判断のゲームとは、典型的には、世界の実際のあり方の判断に関わるものである。例えば、われわれが赤や四角と判断する物について、それに同意を示さなかったり、あるいは青や丸いと言う者に対しては、光の当たり具合を変えたり、立つ位置を変えることによって、判断の一致を促すことになるだろう。けれども、そうした努力にも関わらず判断が収束していかないとき、われわれは、自身と異なる判断を下す者を、自身と同じ概念を共有していない他所者として見なすことだろう。また単純な計算や数列などの数学的な概念もこの種のゲームでプレイされるものの典型と言える。このように、判断の不一致に「排除」で応じられるようなタイプのゲームを「不一致を許容しないゲーム」(A)、そしてゲーム A で用いられる諸概念を、便宜的に「客観的」な概念と呼ぶことにしよう⁵。

¹ 今日では、「不確実性」はおもに認識論の文脈において、「不確実性」はおもに意味論の文脈で使用される概念であるように思われるが、ウィトゲンシュタインは「不確実性 (Unsicherheit)」と「不確定性 (Unbestimmtheit)」という二つの表現を区別なく用いている。ウィトゲンシュタインの枠組みにおいては、認識論/意味論の区別自体が存在しないため、現在使用されている両概念の用法とのあいだには、微妙なひらきがある。ただ筆者は、この不確実性/不確定性の問題を『確実性の問題』で論じられた「確実性」との対比において捉えるという動機づけを有するため(注 27)、ウィトゲンシュタインからの引用以外は、一貫して、「不確実性」というタームを採用することにしたい。また本稿におけるウィトゲンシュタインからの引用は『ウィトゲンシュタイン全集』(大修館書店)および『ラスト・ライティングス』(講談社)を参照しつつ、部分的に変更を加えて訳出している。

² 「他所者に対処するための一貫した方策が、それとわかる社会の型を生み出すのと全く同様に、変則例に対処するための一貫した方策は、各々の言語ゲームに特徴的な容貌を与えるはずである」(Bloor 1983, p. 140) ブルアはこのアイデアを、文化人類学者のメアリー・ダグラスや、科学哲学者のイムレ・ラカトシュから学んでいる (pp. 139–41)。Douglas (1975) は、変則事例に対処する仕方が「無関心」「排除」「包摂」「日和見的態度」の4つに尽きていることに着目し、それに応じて社

会の型が生み出されると指摘している。また Lakatos (1976) も、オイラーの定理の妥当性を巡る論争を例に、提示された反例に対する対処の仕方がたかだか4ないし5つのパターンしか存在しないことを指摘している。ブルアは、ダグラスやラカトシュにおいてあくまで経験的な次元で捉えられていたこうした反応パターンを、言語ゲームのルールを規定するアプリオリなものとして捉え返している。

³ 筆者はブルアのアイデアを参考にしてはいるものの、全ての言語ゲームが逸脱事例の反応の仕方に応じて分類可能だとは考えていない。またダグラスが行なったような、逸脱事例に対する反応の差異がどのような機構によってもたらされるのかという原因の分析も本稿の主題を外れる。

⁴ 本稿は Hurley (1989) の研究に大いに示唆を受けている。とりわけ、概念には一方の極に、適用判断の一致を強く要求され、実質的な対立の可能性を全く残さないグループ、他方の極に、適用判断の不一致が許容され、実質的な対立の可能性を残すグループがあり、その一方の極から他方の極に至る緩やかな連続スペクトルとして概念の全体像を捉える (Chap. 3) というハーリーの視点は、本稿全体の指針を与えるものである。

⁵ 誤解を避けるために付言しておく、ここでの趣旨は「客観的な概念を使って行われるゲームでは、判断の不

これに対し、判断の不一致に「寛容的態度」で応じられるようなゲームとは例えば以下のようなものである。いま、K 君の立ち振る舞いから、彼がどのような心的状態にあるのかについて、友人同士で話し合うという場面を想定してみよう。いま、K 君の H さんに対する特定の振る舞いを見て、多くの友人が K 君の H さんに対する好意の情を確信している。そんななかで一人だけは、そのような確信を抱かなかったとしよう。このとき生じている判断の不一致は、先のゲーム A において生じた不一致とは性格を異にするように思われる。というのも、この人は、たとえ周囲の人間から、人の心を推察するのが下手だと揶揄されることがあったとしても、「好き」という概念を理解していないと見なされるようなことはふつうないからだ。このように、判断の不一致に対し「寛容的態度」で応じられるようなタイプのゲーム⁶を「不一致が許容されるゲーム」(B)、そしてゲーム B で用いられる諸概念を、ここでも便宜的に「主観的」な概念と呼ぶことにしよう。

本稿の問題意識は、このゲームルールのデザインの違い、とりわけ、ゲーム A の一種である「物」に関わる判断のゲームと、ゲーム B の一種である「心」に関わる判断のゲームのルールデザインの違いにある⁷。ゲーム A と異なり、なぜ、ゲーム B においては互いの判断の不一致が認められ、異なる判断を下す者に対しても寛容な態度が取られるのだろうか。多数の人が喜ん

でいると判断するところでそのように判断しない者への反応と、赤を赤でないと言う人に対する反応はなぜ同じではないのだろうか。

晩年期のウィトゲンシュタインが論じた概念の不確実性の問題⁸とは、このゲーム B で用いられる心的概念に関わるものである。この問いに対するウィトゲンシュタインの回答は一言で言えば「心的概念のうちには、適用規準の不確実性が本質として含まれているから」というものになる。彼の見立てによるならば、心的状態の判断において不一致が許されるのは、心的概念の適用規準が、画一的にならないことを織り込んだ設計になっているからだと言うのである。だから心的概念に関して言えば、人によって適用判断に食い違いが生じることは、その概念が健全に機能している証であり、なぜズレが生じているのかと問うこと自体がどこかの外しているということになる。

本稿の課題は、ウィトゲンシュタインのテキストを元に、心的概念に不確実性が織り込まれざるを得ないのはなぜかを明らかにし、さらに概念に織り込まれた不確実性の有無という観点から、ゲーム A と B のルールデザインの質的な差異を理解することにある。その本格的な作業は 3 節で行うこととし、以下では「概念のうちに適用規準の不確実性が含まれている」という主張の意味についてもう少し説明を加えておくことにしよう。

再び、K 君の心的状態についての話し合いで生じる判断の不一致について考えてみる。われわれはいま、この不一致を、心的概念に本質的に含まれる適用規準の不確実性に由来する事態として処理することを目指

一致に対して「排除」で応じられる」ということではない。事態は逆に「判断の不一致に「排除」で応じられるゲーム内で用いられる概念が客観的と呼ばれる」のである。それゆえ、ある概念が客観的か否かは、それがどのようなゲーム内で使用されているかに依存する。「赤」や「四角」といった概念も、判断の不一致が放置されるようなゲームで用いられるならば、「主観的」なものになりうる。主観的と客観的という区別の内実が「他人との意見の不一致とその取り扱いに関するわれわれの実践の在り方の差異」(p. 131)にあるという点については野矢 (2012) を参照。

⁶ ウィトゲンシュタインは次のように述べている。「同じ証拠によって、一方の人は完全に確信をし、他方の人は確信しない、ということもありうる。だからといって、われわれはどちらの人をも、判断能力のない人、あるいは責任能力のない人として社会から閉め出すことはしない」(RPPⅡ §685)

⁷ ゲーム B には、心的状態の判断以外にも、たとえば、趣味判断や美的判断のようなものも含まれる。したがって、判断の不一致が許容されるゲームであるからと言って、必ずしも心的状態の判断にかかわるとはかぎらない。しかし心的状態の判断をしているならば、それは必ず不一致が許容されるようなルールのもとで行われる。

⁸ これと似たようにも思われる問題として「曖昧性 (vagueness)」の問題がある。周知のとおり、曖昧性とは、鮮明な境界線が存在せず、「境界線事例 (borderline case)」が生じる事象であるが、本稿では基本的には両者を、別の問題として理解している。たとえば曖昧性の場合には、確実に述語 F が当てはまるケースと、確実に述語 F が当てはまらないケースの存在が想定されている。言い換えれば、それについての判断を共有していなければ、概念を正しく習得しているとは言えないような典型的な事例の存在が前提となっている。これに対し、ウィトゲンシュタインが論じている概念の不確実性の問題は、そもそも、そうした判断が一致しなければならない典型事例自体が、成り立たないことを示唆しているように思われる。本稿で直接に論じることはできないが、曖昧性の問題と客観的な不確実性の問題の違いを考えることによって、前者を、後者というより一般的な問題のひとつとして体系づけることが可能かもしれない。

している。だが、こうした不一致についてはふつう、次のように考えて然るべきではないだろうか。つまり、このメジャーな判断を下した人と、マイナーな判断を下した人とは、所有している経験的な情報の量に違いがあると見なすのである。例えば、このマイナーな判断を下した人は、K 君との付き合いが浅く、きちんとした判断材料を持ち合わせていなかったと考えることは、至極穏当な見解であるように思われる。こうした、「ある概念が適用されるか否かを決定するための十分な情報を欠いていることに由来する、認識的な不確実性の一形式」(ter Hark 2001, p. 95)をワイトゲンシュタインは「主観的 (subjektive) な不確実性」(cf. LWI §§887, 888; LWII p. 23)と呼んでいる。

ところで、情報の量に限らず、判断の不一致を何らかの要因 (の差異) に訴えることで説明するというモチベーションの背景には「その要因を制御しさえすれば、判断は収束していく」という暗黙の想定がある。このケースで言えば、「共有している情報量が等しくなれば、心の状態について同じ判断に至るはずだ」という想定があるからこそ、その判断の不一致を、情報の量の差異によって説明することができると見なすのである。

これに対し、われわれは、この判断の不一致を「概念に適用規準の不確実性が織り込まれている」(LWII p. 70) ことに由来する「客観的な不確実性」(LWI §888)の問題として扱おうとしている。それが意味しているのは、「たとえいかなる条件を制御したとしても、心的状態の判断が収束することはない」ということだ。つまりこの不一致を、それ以上遡及して説明することができない「ゲームの本質」(ibid.) ないしゲームの限界に属する事柄として捉えようとしているのである。

たとえば、収束を目指すゲーム A における色判断の不一致は、観察者同士の空間的位置や、身体状況の違いによって説明をすることが可能かもしれない。だが、ゲーム B における心の状態の判断の不一致には、色の判断の不一致における、観察者同士の空間的位置や身体状況に相当するものは存在しない。したがってわれわれは、心的状態の判断の不一致を、何らかの経験的な要素に訴えることで解消可能な「主観的な不確実性」の問題として捉えることを拒否する。それはゲーム A とゲーム B という質的に相容れないルール同士の混同ないしは、不当な乗り越えであると本稿では主張したい。

2.1 規準概念解釈

ところで、ワイトゲンシュタインは、心的概念の不

確実性の問題をしばしば、心的概念の「規準の不確実性の問題」と呼んでいる (LWII p. 70, 86, 87)。この後期ワイトゲンシュタイン哲学の核をなす「規準 (criterion)」概念はしばしば、「いかにして外的な振る舞いが、他者の心的状態について知っているという主張を正当化しうるのか」という認識論的な観点から解釈されてきた (McGinn 2013, pp. 205–6)⁹。だが、こうした解釈はいずれも、心的状態の判断において生じる不確実性の問題を「主観的な不確実性」の問題として処理しようとしている。以下では、ライトとマクダウェルの主張を瞥見し、それらが対照的な主張でありながらも、いずれも「客観的な不確実性」の可能性を排除しているという点を確認しておこう。

まずワイトゲンシュタインの用いる「規準」概念の内実を押さえたい。この概念は「兆候 (symptom)」概念との対比において、以下のように導入される。

ある初歩的な混同を避けるために、対照的な二つの言葉を導入することにしよう。「かくかくであることがどうして分かるのか」という問いに対し、「規準」をもって答える場合もあれば、「兆候」でもって答える場合もある。ある特定のバクテリアによって引き起こされた炎症が医学ではアンギーナと呼ばれているとして、具体的なケースにおいて「この人がアンギーナに罹っていると言えるのはなぜか」と尋ねるとき「彼の血液中にこれこれのバクテリアを見つけたから」という回答は規準、あ

⁹ こうした解釈の背景には、他者の心的状態における懷疑論を拒絶するというモチベーションがある。この路線と一線を画した解釈を打ち出したのが、Cavell (1979) である。カヴェルによれば、ワイトゲンシュタインが「規準」概念に訴えるのは、懷疑論を拒絶するためではなく、むしろ、「規準が [いつか] 底に達すること」(p. 412)を示すことにある。そして他者の心についての懷疑を完全には排除できないということが、心的概念を用いた言語ゲームにとっては本質的であると解釈している。このように、本稿で扱う心的概念や心的概念を用いたゲームに内在する不確実性という主題をワイトゲンシュタインのリマークのなかに正しく見出したのはカヴェルが最初である。だがカヴェルは、他者の心的状態にかんしてわれわれは懷疑主義を生きざるをえない (p. 432) と主張することによって、結果的に、他者の心的状態について日常的にわれわれが抱く懷疑と、懷疑主義者による哲学的懷疑というワイトゲンシュタインが蔑ろにしない区別をややむやにしてしまっている (McGinn 2004, p. 244)。カヴェルの議論の概要については、荒畑 (2016) も参照。

るいは定義的規準とでもいべきものを与えている。他方でその回答が「彼の喉が炎症を起こしているから」というものなら、これはアンギーナの兆候を与えている。(BB 24-5)

患者がアンギーナに罹患しているということがどうして分かるのかという問いに対して、喉の炎症を引き合いに出すことと、バクテリアの検出を引き合いに出すこととは、その回答に与えられる身分が全く異なることがここで強調されている。というのも、喉の炎症は、アンギーナとは別の要因によるもので、実際にはアンギーナには罹患していなかったというケースが考えられるのに対し、特定のバクテリアが検出されたにも関わらず、アンギーナに罹患していないという可能性はここでは存在しないからである。

喉の炎症とバクテリアの検出が、アンギーナに対して有している関係の身分の差異は、一言で言えば、それらが「アンギーナ」という概念の意味を内的に構成しているか否かという点に求められるだろう。アンギーナへの罹患という事態の把握のうちには、特定のバクテリアの検出という事態が含まれているのに対し、喉の炎症の場合はそうではないのである。バクテリアが検出されたならば、それは医者にとっては患者のアンギーナへの罹患を確信すべき状況であり、「この患者はアンギーナに罹患しているかどうか分からない」あるいは「罹患していないかもしれない」と抗言する人は、逆に、そのような懐疑に導かれる理由を明示する必要があるということになる。

2.1.1 ライトによる棄却可能性解釈

次に他者の振る舞いを観察することで、他者に心的概念を適用するというケースを見てみよう。例えば、非常にシンプルな例として、今、頬を押さえて泣いている子どもがいるとする。このとき、子どもが口腔部に痛みを抱えているということは一見すると確からしく思われる。こうした判断においては「頬を押さえて泣いている」ということが「痛み」という概念の一つの規準になっている。しかしこの判断が常に正しいとは限らないだろう。子どもは、何らかの意図をもって、誰かを欺くために痛がついているふりをしているのかもしれないし、また単なるイタズラ心で、痛みがある時と同じように振舞っているからかもしれないからだ。つまり、頬を押さえて泣いているにもかかわらず、この子どもが痛みを抱えていないというケースが容易に想

定できるのである。

ここにアンギーナのケースには見られない問題が生じる。先に述べたように、ウィトゲンシュタインの言う規準とは、あくまで概念同士の間に成り立つ論理的な内面的関係であった。では、一方で (i) 証拠立てられるものの意味を内的に構成しつつも、他方で (ii) 証拠立てられているものの成立を必ずしも保証しないような関係とは果たしてどのような関係なのだろうか。

この一見すると矛盾した事態について、多くの論者が「文法的により証拠 (grammatically good evidence)」(以下 *GGE*) という折衷案に訴えることで解決を試みてきた¹⁰。

- *C* は *P* が成立していることの規準である。⇔
C は *P* が成立していることの文法的により証拠である。(GGE)

この *GGE* 見解は、*C* が *P* の意味を内的に構成するという点は確保しつつも (grammatically)、*C* を *P* の成立を保証する証拠としてではなく、あくまで「よい証拠」であると見なす。よい証拠と言われるのは、特殊な文脈を考えない限りは、*C* が成立していることをもって *P* であることを主張して差し支えないのだが、この証拠関係は将来的に棄却される可能性 (defeasible) に晒されていると考えるからである。この *GGE* 見解を取る論者の一人であるライトは、規準とは本質的に棄却可能なものであると考え、次のように述べている。

その規準に基づいてなされた主張が、その規準が確かに満たされているという信念を維持することと整合しつつも、後々になってから放棄されるということがありうる。(Wright 1986, p. 97)

ライトの見解を先の振りのケースに適用すればこうなる。頬の押さえや泣き声といった規準は、「痛み」の概念を構成しており、それは痛みの存在を主張するための証拠となる。しかしこのケースでは、振りをしているという特殊な状況のせいで、頬の押さえや泣き声といった規準が成立しているにも関わらず、痛みは実際には存在せず、その証拠関係は棄却されてしまうので

¹⁰ この *GGE* という名称は、Loomis (2007) から借用している。ルーミスはこの *GGE* 見解をとる伝統的な研究として、Shoemaker (1963), Lycan (1971), Wright (1982), Hacker (1993), Tomassi (2001) などを挙げている。(pp. 240–1)

ある。

2.1.2 マクダウェルによる棄却不可能性解釈

この GGE 見解とは対照的に、規準を本質的に棄却可能なものと考えする必要はないと主張するのがマクダウェルである。マクダウェルによれば、「 P のための規準 C が充足されているにも関わらず、 P が成立しない」という可能性を認めるということは、 P だと知っているということが規準 C によっては必ずしも正当化されないことを意味する。しかしマクダウェルにとってこれは受け入れられない。

子どもが痛がっているふりをしているケースに再度目を向けよう。ライトによれば、証拠関係自体が棄却されるにしても、それでも痛みの規準 C 自体は問題なく成立していると考えている。しかしマクダウェルによれば、ここでは規準 C がそもそも成立しておらず、当然その証拠関係も棄却されていないと言う。子どもは、規準 C があたかも成立しているかのように振舞っているだけなのである。

両解釈の差異は、本当に痛がっていることと痛がっているふりをしていることとの関係をどのように理解するのかという観点から捉えることが出来るだろう。ライトは後者を、前者を原型とする一つのヴァリエーションとして把握している。そして本当に痛みを抱えている状況においては成り立つはずの規準 C と P の間の証拠関係に、振りという要素が追加されることでその関係が棄却されると考えている。これに対し、マクダウェルは、前者と後者とで成立している状況を、振りの意図の有無だけで区別されるような単純な差異ではなく、全く異なる状況として捉えている。マクダウェルの見解に従えば、振りのケースを持ち出すことで、規準を棄却可能なものと考えする必要は全くない。規準の関係はあくまで棄却不可能なものなのである。

2.1.3 両解釈の問題点

ここではこれ以上両解釈の細部に立ち入ることはせず、両解釈に共通する問題点のみを指摘しておきたい。それは「アンギーナ」における規準と他人の「痛み」における規準とが同一の次元で成立することに、両解釈とも全く反省的でないという点にある。つまりアンギーナと痛みが、文法的に全く異なっており、アンギーナにおいて成り立つ確実な規準が、痛みにおいてはそもそも成立しないかもしれないという可能性が全く検討

されていないのである¹¹。

マクダウェルの場合には、規準をあくまで棄却不可能なものであると論じることによって、心的概念においても「アンギーナ」と同様の確実な規準が（それが経験的に得られるかどうかは別問題として）成立することに疑問を抱いていないように見える。またライトも、より強力な証拠の出現によって棄却されるという意味で、心的状態の判断には不確実性が取り巻いていることを認めるものの、そこでの不確実性とは、得られている証拠の不足によってもたらされる経験的なものに過ぎず、アンギーナの規準と痛みの規準はあくまで同列に論じられている。端的に言えば、心的概念の適用をモデルに規準概念の解釈がなされてきたにも関わらず、『ラストライティングス』で論じられている、客観的な不確実性という可能性が無視されているのである¹²。

このように、心に関わる概念とそうではない概念の文法の質的差異について、ウィトゲンシュタインは次のような仕方では注意を促している。

[感情表現の判断において] 人々の間に、確信の確実性について一致が存在しないということは、われわれの概念の構成を決定する際の助けとなるに違いない。(色彩判断における一致、および数学における一致についての所見と比較せよ¹³。) (RPPII §684)

ここで語られているウィトゲンシュタインの問題意識は次のように言い換えることができる。すなわち、なぜアンギーナの判定や色彩の判断や数学においては成立しうる確信の一致が、心という領域においては成立しないのか。以下でわれわれは、確信の一致が存在しないという事態を、確信の一致が成立するケースと比較したうえで、確実性の欠如や「欠陥」として見なすのではなく (cf. RPPII §657)、むしろ心的概念を積極的に特徴づけるものとして捉えるつもりである。次節では、ウィトゲンシュタインのテキストを参照しつ

¹¹ 山田 (2009) は、「ウィトゲンシュタイン最後の思考の眼差しはむしろ、「痛み」や「喜び」といった心的概念が「アンギーナ」や「椅子」という概念」とどのように異なっているのか、という点にこそ向けられていた」(p. 206) と述べている。

¹² じっさい規準概念の解釈研究については、『青色本』や『哲学探究』への言及こそ多いものの『ラストライティングス』は、ほとんどかえりみられることがない。

¹³ [] 内は筆者による補足、強調点も筆者によるもの。

つ、心的概念に不確実性が織り込まれざるを得ないのはなぜなのかを考えていくことにする。

3. 心的概念の不確実性

いま述べた通り、ウィトゲンシュタインが心理学の哲学の文脈で論じている不確実性とは、概念適用 (application) の次元ではなく、概念規定 (determination) の次元に属する「客観的な不確実性」であった (cf. RFMIII-84)¹⁴。だがなぜ、概念適用の次元ではなく、概念規定の次元に不確実性を繰り込んでやる必要があるのだろうか。あるいは同じことだが、心的状態の判断における不一致を、なぜ実際の適用の次元においてではなく、そもそもの概念設計の次元において解消しようとするのだろうか。ここには「我々の諸概念には、我々の生活が反映されている」(LWII p. 72) という洞察が大きく関わっている。

『哲学探究』の、概念と生活とのあいだに成り立つ内的関係—本質的に異なった生活だけが本質的に異なった概念を産み出す—を強調した言語観 (cf. PI §19) は『ラストライティングス』においてもなお保持されている。そこでは「生活形式 (Lebensform)」という語は形を潜め、新たに「生活パターン (Lebensmuster)」(cf. LWI §§211, 365; LWII p. 40, 42, 43) というタームが採用されている。だがこのタームによってウィトゲンシュタインが焦点を合わせるのは、われわれの生活の規則性ではなく、むしろその不規則性である。

ある生活パターンがある言葉の使用の基礎になっているとすれば、その使用には不確実性が存在するのでなければならない。実際、生活パターンとは厳密な規則性ではない。(LWI §211)

もし概念がわれわれの生活パターンを反映したものであるならば、しかもその生活パターンが単純で規則的なものばかりでなく、複雑で不規則なものでもあるとすれば、そうした不規則な生活パターンを反映したような概念が存在するのでなければならない¹⁵。ここに、適用規準の不確実性が織り込まれた概念が要請される理由がある¹⁶。そして「悲しみ」や「喜び」等々

¹⁴ 注 9 で述べたように、心的概念の不確実性という主題に最初に着目したのは Cavell (1979) であるが、その主張は、日常的な懐疑と哲学的な懐疑、そして心的ゲーム一般を特徴づける不確実性と、個別の具体的なケースにおいて問題となる不確実性という区別を蔑ろにしてしまっていることが、McGinn (2004) によって批判されている。同じ主題について、例えば ter Hark (2000) は、主観的／客観的な不確実性の区別を整理したうえで、心の哲学の文脈でウィトゲンシュタインに行動主義や消去主義の立場を帰属する解釈が、客観的な不確実性を強調するウィトゲンシュタインの立場と整合しないとして、これらをしりぞけている。また「生活パターン」という観点から、心的概念の不確実性の問題にアプローチしたのも、ハークのこの研究が初めてである (同様のアプローチが ter Hark (2001, 2004) にも継承されている)。しかしハークは、心的概念の不確実性と生活パターンの不規則性とのつながりを強調しつつも、不規則であることがどのようにして不確実性を帯びた概念の形成へとつながるのかについて詳述を避けている。また、心的概念の適用規準が曖昧なものにならざるをえないという主張に留まることで、多義的であること (本稿 3.2 節) が心的述語にとって本質的である点に注意が払われてない。本稿はハークのアプローチを継承しつつ、後述する心電図の比喻 (絨毯の比喻) に即して、振る舞いの不規則性が、不確実性を本質とする心的概念の形成にどのように寄与しているかを明らかにし、Bloor (1983) や野矢 (2012) らの言う「異なる判断が許容されるゲーム」として心的状態の判断がプレイされる理由を、不規則性という観点から説明するという位置づけをもつ。また、不確実であることをポジティブな事態として捉えることに焦点を合わせ、ウィトゲンシュタインとメルロ＝ポンティの哲学の類比性を論じたやや異色の研究として Cerbone (2017) がある。同主題の先行研究としては、注 15 も参照。

¹⁵ 心的概念に内在する不確実性は、「振りをする」概念との関連において論じられることも多い。例えば山田 (2009) は、痛い振りをするのが何らかの合理的な意図を背景にして行われること、その意図を帰属するには、彼の「人格」にかんする全体的な理解が不可欠であること、そして、そうした人格の理解の仕方は、この彼に対してのみ通用するもので、証拠の規則として一般化することができないことを理由に、心的状態の判断が、人びとのあいだで一致をみないことがありうると述べている (pp. 212-3)。また古田 (2006) も、振りをするような「虚構的概念」の習得および虚構的概念が織り込まれたゲームをプレイできるようになることが「心をもった」ということであり、相手の言葉の抑揚や表情の陰影、身振りなどを観察する「証拠のゲーム」は、生活がシンプルすぎる犬などの動物に対しては通常行われず、振りをする可能性込みの、複雑な生活を送る者に対してしか行われないと述べている (pp. 119-20)。本稿では、心的概念の端緒と見なされてきたこの「振り」概念を、われわれの生活パターンの不規則性を増大させる契機のひとつと見なしたうえで、「不規則性」というより一般的な概念に、心の端緒を見出すことを目指している。そしてこの生活パターンの不規則性という観点から、被観察者ごとに、一般化できない固有の仕方での心的状態の判断をすることを余儀なくされることが説明される。

¹⁶ 大胆に言ってしまうと、不確実性が織り込まれた概念と

の心的概念は、まさにこのような仕方であって要請されるものだとすることを示すのが、本節の課題となる。

3.1 振る舞いのパターンを検出する：心電図の比喻

はじめに、他者の心の状態について推察するゲームが、他者の振る舞いの観察を通じてなされるものであるという前提を確認しておきたい。「心」という概念が、観察者による心的状態の帰属という実践のなかで規定され、しかもそうした実践が、他者の振る舞いの観察を通じてなされる以上、心的概念は、われわれの振る舞いのパターンを—それが不規則なものにせよ、規則的なものにせよ—何らかの仕方で反映して形成されたものでなければならない。そして、このゲームにおいてプレイヤーがしている心的概念の適用判断とは、つまるところ、時事刻々と進展していく被観察者の振る舞い全体のなかから、特定の振る舞いのパターンを検出する作業ということになる。

以上の点を認めるならば、心的状態の判断を、ウィトゲンシュタインのように絨毯の上に浮かび上がる模様の読み取り作業¹⁷に比することが許されるだろう。ただ以下では、不断に進展していく「生活の流れ」(LWI §913; LWII p. 30) というダイナミズムを強調するために、心電図のモニタリングの比喻を採用することに

したい。この比喻に則して、概念の形成とパターン認識という事態についてしばらく考えてみよう。

まず、一定のリズムで打つ健康な心臓の心電図をモニタリングする時のことを考えてみたい。一般に、健康な心臓の心電図は、小さい波 → 下向きの尖った波 → 上向きの尖った波 → 下向きの尖った波 → 少し大きな波を一定の周期で繰り返すことが知られている¹⁸。いま、議論の単純化のために、我々がモニターしている心電図にはこうした規則的な波形しか映しだされないと仮定しよう。このような規則的なパターンをリソースに形成されてくる概念はどんな性格をもつだろうか。規則的な反復によって、そのパターンの始まり（小さい波）と終わり（少し大きな波）が明瞭となることから、このパターンに対して割り当てられる概念（例えば「正常波」）は、その境界がシャープなものとなることだろう。どこからどこまでが一つのまとまりを形成しているのか、いつそのパターンが表れているのか等々について、白と黒とがはっきりするのである。またそのパターンが確定することによって、そのパターンを構成する各要素についても、概念が割り当てられるかもしれない。（実際、こうしたパターンの各々の構成要素に対して、P 波、Q 波、R 波、S 波、T 波と名前がつけられている。）そこで形成される概念もまた、境界のシャープなものとなるだろう。

このように「規則的な流れ」があるところで成立する概念とは、境界が「厳格 (starr)」、明確 (scharf)」(LWI §§246, 267) であり、その適用標準は、確実なものとなる (cf. RPPII §653)。それゆえ、その波形をどう見なければならず、どのような概念を適用しなければならないかに関して、概念使用者に課せられる要求は非常に大きくなる。それゆえ、正常波の生起について、判断の食い違いが存立する余地はないだろう。正常波を読み取るべき状況でそれを読み取らない者は、そもそも、「正常波」という概念を所有しているというステージに立てないことになる。

次に、心電図に映し出される波形に不規則性が紛れ込む状況について考えてみよう。例えばこんな調子である。まずフラットな状態から比較的小さな波が来て、上向きの尖った波、下向きの尖った波、比較的大きな波が続く。そしてまた小さい波がやって来る。だが今度は先とは違い、比較的大きな波が最初にやってきて、次いで尖った波がやってくる。そしてまた小さい波が

は、われわれの生活パターンの不規則な側面—ウィトゲンシュタインはこれを「ゆらぎ (Schwanken)」(cf. LWI §§243, 953, LWII p. 81) と呼ぶ—をも規則のうちに取り込んでしまっている概念ということになる。

¹⁷ ウィトゲンシュタインは、われわれの生活全体を一枚の「絨毯 (Teppich)」に見立て、心的概念の適用を、その絨毯上の図柄の読み取り作業に比している。(cf. RPPII §§651, 652, 672, 673) この比喻を通じてウィトゲンシュタインは、図柄の背景に不規則性が紛れ込んだときに、図柄の認識の仕方が一様でなくなり、不確実性が紛れこまざるを得ないことに焦点を合わせている。以下を参照。「ある概念が、特定の生活の型に結びついているとすれば、その概念には確定性が存在するのだからなければならない」。そう言う際に私が考えているのは次のようなことである。細長い生地の上に規則的に続くパターンが描かれており、そのパターンを背景にして、パターンの上に不規則なスケッチないし絵画が描かれている。我々はそのスケッチないし絵画をパターンと結びつけて記述する。なぜなら、我々にとって両者の結びつきが重要だからである。パターンが abcabcabc… と展開するものだとすると、私はたとえば、ある箇所の c の上にある赤い何かや、その右隣の b の上にある緑色の何かのための特殊な概念をもつだろう。いま、パターンのなかに変則的な事例が一旦生じてしまえば、どう判断を下すべきか私は決めかねてしまうだろう。…」(LWI §206)

¹⁸ 佐藤 (2018) を参照した。

現れるのだが、今度はフラットな状態がしばらく続いたのち、ようやく尖った波が現れる。さらに大きな波、小さい波と来たのち、今度は先ほどとは波の高さが倍もあるような尖った波がやってくる。

このように、波の現れる順番や波同士の間隔、あるいは波の高さが一定でない心電図の中から、われわれが概念を彫琢してくるとしよう。こうしたケースにおいては、先のケースとは異なり、どれを一つのパターンとして見なすかに関して、様々な選択肢が存在することになる。だがいま仮に、先のケースと同様、小さい波 → 下向きの尖った波 → 上向きの尖った波 → 下向きの尖った波 → 少し大きな波という緩やかなまとまりに対して一つの概念を割り振るとしよう。だがそのような完全で理想的なパターンがこの心電図の世界の中で見出されることはなく、様々なゆらぎやノイズを含んだ「不完全」なパターンだけが繰り返し現れることになる。このとき、ある特定のパターンを、この理想型の一つのヴァリエーションとして見なすのか、それとも、その理想型とは区別されたパターンとして見なすべきなのか、あるいは、そもそも何のパターンも形成していないと見るべきなのか等々について、画一的な規準というものは存在しない¹⁹。このように、不規則性を背景として形成された概念は、その境界が「柔軟 (elastisch)」、「曖昧 (vage)」、「しなやか (biegsam)」(cf. LWI §§243, 246; LWII p. 24) ものとなり、それに応じて、パターン認識＝概念適用においても、不確

実性が必ず紛れ込むことになる。ここには、本来探り当てられるべき唯一の正しい見方というものとは存在せず、その観察者の態度にも部分的に左右されるような様々な見方が存在するだけということになる。

さて、ここまで心電図のモニタリングに即して見てきたことを、今度は振る舞いの観察の領域へと投げ返してやろう。すると以下のような事態が想像できるのではないだろうか。人間の振る舞いのパターンがゆらぎを含んだ不規則なものであるならば、それを背景に形成された心的概念は、適用規準の不確実なものとなり、こうした概念を使ってなされる判断のゲームにおいては、不一致の発生はむしろデフォルトの事態なのだ、と。

3.2 規則的な振る舞いには表情性が欠落する

だが問題は、心的概念が成立するために、振る舞いの不規則性が本当に必要となるのかということである。ウィトゲンシュタインによれば、被観察者の振る舞いのパターンが不規則であり、観察者にとって「予測不可能 (nicht-Vorhersehbarkeit)」であることは、「心」という概念にとつての「本質的な特徴 (wesentliche Eigenschaft)」(LWII p. 65) であると言う。端的に言えば、「心」が帰属されるためには、その存在者の振る舞いのパターンは不規則なものでなければならないし、「心」を帰属する観察者にとつても、それは予測不可能なものでなければならないということになる。だがなぜこのように言えるのだろうか。端的に言えばそれは、被観察者の振る舞いが規則的であると想定したとき、振る舞いという「外面」の次元とは別に、「内面」としての心的な次元を設定することにそもそもポイントがなくなってしまうからである。

もう一度、波形パターンが規則的である状況を考えてみよう。このような状況で成立する概念とは、明確で、固定された境界 (RPPII §§622, 683) をもつ、適用規準の明確なものであった。これは言い換えれば、その波形が「一義的」(cf. LWII p. 63) なものとなることを意味する。同じように、われわれ人間の振る舞いパターンが規則的であるならば、各々の振る舞いもまた、「一義的」なものとなることが予想されるだろう。だが、振る舞いが一義的になることが意味するのは、心をもつ者にとつて本質的である「表情」の喪失である。

ウィトゲンシュタインは、振る舞いが多義的でそれゆえ多様な解釈に開かれていることこそが、振る舞いとは別に心という概念が要請されるための重大なポイント

¹⁹ 2.2 節でみたようにライトとマクダウェルによる規準概念の解釈の違いは、「振りをすること」をどのように位置づけるかという点にあった。ウィトゲンシュタインは、模様の比喩に訴えることで、実際に特定の心的状態にあることと、そのような振りをすることの区別を、単純な模様パターンと、その単純な模様パターンからいくつかの要素を借りて出来上がっている複雑な模様パターンの違いとして理解している (谷田 (2019))。たとえわれわれの目を遮るものが何もないとしても、もし絨毯の模様が、例えば他の模様と絡み合っていたり、典型的な模様から逸脱したりしていれば、その読み取りは非常に困難で微妙な作業となる。同じように、痛みをかかえていることと、痛みの振りをすることとの見分けは、たとえ経験的な情報量に不足がないとしても、なお困難な作業となりうる。ライトとマクダウェルがたとえ具体的なケースにおいて判断できなくとも一痛んでいるのか痛みの振りをしているのかを区別するための完全な証拠や情報というものを暗黙裡に想定しているのに対し、ウィトゲンシュタインは、極端に言えば、そのような完全な証拠や情報が成立することによって、心的述語全般が、「心的である」ということのポイントを失うと主張している。

であることを、以下のような思考実験を通じて提示してみせる。いま、振る舞いのパターンの典型として、もっぱら顔の部分にのみ着目をするにすること²⁰。観察者がその顔に内面の表出として表情を読みとるためには、当然のことながら、顔は「可変的 (Veränderlichkeit)」でなければならないだろう²¹ (cf. RPPII §§615, 627)。(微動だにしない顔の不気味さというものを想像して欲しい) だがその変化が、ある配置の次には別の配置が来て、さらに別の配置が続くというものだったらどうか (cf. RPPII §614)。例えば、目は細められ、眉間には皺が寄って、口はすぼめられているのがいま観察されているのだが、次の瞬間には、目は見開かれ、口の両端が後上方に一定の角度にまで引きあげられ、そして次の瞬間には、平常の状態に戻る、という具合に、である。健康な心臓の心電図のように、その運動パターンが定期的に反復し、しかもその予測が裏切られることがないとしたら、その顔は、現に観察者に見えている以上の奥行き、「外面」と対比された意味での「内面」をもつことのない「自動機械」(cf. LWII p. 65, 66) のように観察者に映るに違いない。この意味において「不規則性は相貌 (Physiognomie) の一部」となっている (RPPII §615) と言える。

同様のことは、顔以外の振る舞いのパターン全般について当てはまる。

可変性 (Variabilität) それ自身が、欠くことのできない振る舞いの特徴なのであり、それがなければ、振る舞いはわれわれにとって全く違ったものとなることであろう。(例えば、悲しみの特徴的な顔つきは、その可動性 (Beweglichkeit) よりも意味のあるものではない。)

²⁰ 生活パターンの一つのモデルとしての顔の表情への着目については、ter Hark (2004) を参照した。

²¹ ter Hark (2004) によれば、『心理学の哲学 1』のたたき台となった草稿 (MS 134) で、ウィトゲンシュタインは、ダーウィンが『人及び動物の表情について (The Expression of the Emotions in Man and Animals)』(1872) で提示した 3 つの原理のうち、2 番目の「反対の原理」(愛と憎しみのような正反対の心的状態は、正反対の動作によって表現される) にダーウィンの名前と共に言及している (ibid., 166–7)。ダーウィンは、この反対の原理について述べたある箇所で、「表情の本質は、絶え間ない揺れ動く運動 (continuous flexuous movement) のうちにある」(p. 56) と述べており、ハークは、顔の表情について考察する際に、ウィトゲンシュタインがダーウィンの影響下にあったことを示唆している。

(RPPII §627)

「苦悩」とは、生活という織物のなかに繰り返して現れる一パターンを記述するものだ。ところで、このパターンには経過というものも含まれる。もしも一人の人間のなかで、悲嘆と喜びの身体表現がたとえばメトロノームのカチカチ音と共に交代するとしたら、悲嘆のパターンも喜びのパターンも生み出されないことになるだろう。(LWI §406)

規則的な運動を繰り返す顔に「表情」が宿らないのと同じく、悲嘆と喜びの規則的な身体表現もまた表情性を欠くことになる。ウィトゲンシュタインの言葉を借りるならば、こうした存在者の挙動には「微妙な陰影 (fein Abschattung)」(RPPII §616; LWII p. 65) と呼ぶべきものが欠落しているのである²²。

振る舞いが、単なる振る舞いという次元を越えて、何らかの心的状態の表出としてみなされるためには、それは一義的であってはならない。表情性 (多義性) をもっているからこそ、単なる振る舞いという次元を超えて、他者の中に「心」を設定することにポイントが生まれるのである。心が、他者への心的状態の帰属という実践の中で規定されるならば、そして表情をもたない存在者に対してわれわれが心を帰属することがないならば、表情を欠いた存在者が心をもつことはない。それゆえ、表情を成立させる振る舞いの不規則性こそが、心という概念にとって本質的なものである²³。

ここで本稿の当初の問題設定へと立ち返ることにしよう。われわれの問題意識は、判断の不一致に対し「拒絶」と「寛容的態度」という対照的な反応がとられるゲームのルールデザインに関わるものであった。なぜ判断の不一致が許容されるようにデザインされたゲームと、そうでないゲームとが存在するのか。われわれ

²² 逆に言えば、どれほど人間とは異なる見かけをしていても、不規則な振る舞いを示す存在者が「心」をもつ可能性があるということである。以下のリマークを参照。「人間の姿はしているのだが、機械的に振る舞う存在者よりも、犬のほうがよほど人間らしい」(RPPII §623)。

²³ 3.3 節で再述するように、本稿の狙いは心的概念の必要十分条件を与えることにはない。ここでの主張も、「多義的であれば、心である」というものではなく (多義図形であるからといって心が要請されるわけではない)、心的概念があくまで「心的」と呼ばれるに値するためには、それは多義的でなければならないというものである。

は今やこの問いに一つの回答を与えることができる。概念には、これまで検討してきた心的概念のように、不確実性を織り込んで設計がなされているタイプのものと、確実性が織り込まれ、その適用判断について皆が一致することを本質とするタイプのものが存在するのである²⁴。それゆえ、どちらのタイプの概念を使ってゲームがなされるかによって、判断の不一致に対して与えられる身分も変わってくることになる。一致を本質とする概念（例えば数学的概念）の適用判断においては、その不一致は、当然、本来あってはならないもの、したがって解消されるべきものとして位置付けられる。そしてその不一致が、何によって生じているのかを探ることはきちんとしたポイントがあるだろう。それに対し、不確実性が織り込まれた概念の適用判断における不一致は、言うなれば、概念が健全に運用されていることの証なのである²⁵。それゆえ、ズレがなぜ生じているのかという問い自体がここでは必ずしも意味をもつわけではない²⁶。この差異は、さらに別の差異によって説明がなされるべきものではなく、それ以上遡ることのできない原初的な差異として受け入れなければならない可能性があるものなのである。

²⁴ 「訓練」や「反応の一致」の意義を強調するウィトゲンシュタインの言語観はしばしば「概念の習得という事態に対して負荷をかけすぎのあまり、概念の適用上の不一致を全て生活形式の不一致に回収してしまい、実質的 (substantive) な対立の可能性を排除している」という批判に晒されがちであるが、これは誤解である。この点については、Hurley (1989), pp. 30-54 を参照。またここでは、対照的な二類型の存在を示唆しているだけで、あらゆる概念がこのいずれかに分類されるという二分法を主張しているつもりはない。

²⁵ Gallie (1955) は、適用判断が食い違い、論争が生じることを本質とするような「本質的に論争的な概念 (essentially contested concept)」の存在を示唆している。ガリーはそうした概念の特徴として7つを挙げているが、その内の一つに、その概念が評価に関わるものであることを数え入れている。本稿では論じることができなかったが、人間の心のありようについての判断と、評価的判断について用いられる概念が、いずれも、画一的な適用規準をもちえないことは偶然ではないように思われる。ガリーの議論の概要については、伊藤 (2016) に詳しい。

²⁶ これはちょうど、色や形や音等々についてアブノーマルな判断を下す者の身体的特徴について調べることに意味があるのに対し、ジャストロー図形をウサギと見ている人とアヒルとして見ている人の差異がなぜもたらされているのかを探究するのに意味がないのと類比的である。

3.3 自然に存在する不規則性と心にかかわる不規則性

さいごにひとつの疑念を解消しておきたい。それは、「心電図に現れる波形の不規則性と、心的概念の形成にかかわる不規則性とを同一視してよいのか」という疑念である。たしかに不規則性それ自体は、人間の振る舞いにかぎらず、自然現象のうちにもひろくみられる事柄である。風のそよぎや波、雲の動きなど、自然界はさまざまな「ゆらぎ」にあふれている。しかし私たちは、振る舞い方が不規則であるという一事をもって、風や波に「心」を帰属するようなことはしないだろう。とするならば、不規則性のみによって、心の存在を特徴づけることはできないのではないか。だが本稿が目指したのは、「心をもつ人間とそうでない自然との違いは何か」という問いに、不規則性の有無によって回答を与えることではなかった。3.1 節でも述べたように、焦点を合わせたのはむしろ、「被観察者にたいして心を帰属するとは、何をすることなのか」という問いであり、そういった実践のなかで規定されるかぎりでの心概念であった。したがって、不規則性によって心的概念の定義や全般的な特徴づけを与えたわけではない²⁷。人間と自然とにたいして、われわれが明確な態度の違いを現に設けていることを受け容れながら、この態度の違いの内実を、不規則性にたいするわれわれのスタンスの違いとして析出することが本稿の主眼点であった。

たしかに不規則性は経験的に遍く観察される事象である。しかし、不規則性にたいして、われわれは、それを「本来的」なものとして扱うスタンスと、「非本来的」なものとして扱うスタンスとを採用しうる。そして、「被観察者にたいして心を帰属する」とは、後者の

²⁷ たとえば Davidson (1980) は、心的現象は厳密な法則に包摂することができないと主張し、非法則的一元論の立場を打ち出す一方で、「合理性」概念に訴えることによって、心的現象のあいだに、ある種の秩序が見いだされると主張している。こうした、不規則性を孕む現象のなかでも、人間の振る舞いには合理性という秩序が成立しているという主張は、振る舞いの不規則性を強調する本稿の論旨と対立するものではない。合理性という秩序は、行為者の振る舞いを解釈する際の前提となるものであるが、ある人の振る舞いがそうした解釈に開かれることはその振る舞いが不規則であることによって初めて可能となるという意味で、むしろ両者は、相互不可分の関係にさえあるとも考えられる。ただし、紙幅の都合上、振る舞いの不規則性と、解釈の合理性との関係については、稿を改めて論じることにした。

ように、不規則性を法則性から外れた単なるノイズとして消極的に扱うのではなく、前者のように「別様に解釈する余地を残した多義的」なものとして積極的に扱うことにほかならない。こうした不規則性に対する積極的なスタンスが、ひいては本質的に不確実性をはらんだ心的概念の基盤にもなっているのである。こうした意味において、心概念の発生は、不規則性を端緒とするのである。

4. おわりに

3節のあゆみを整理しておこう。出発点は、概念はわれわれの生活パターンを反映したものであるという洞察であった。もしわれわれの生活パターンが不規則性を含むものであるならば、その不規則な生活パターンを反映した概念というものが存在しなければならない。そして不規則なパターンを反映して形成される概念は、画一的な規準をもつことができず、不確実性を免れられないことを、心電図のモニタリングの比喻を通じて確かめた。ついで、規則的な振る舞いをする者からは表情が欠落するということから、心という概念の成立にとって振る舞いの不規則性が本質的であると主張した。以上からわれわれは、振る舞いが不規則性であることにポイントのある心的概念は、その適用規準の不確実性を免れることはできないと結論づける。それゆえ、心的概念を用いたゲームにおいて生じる判断の不一致は、心的概念が健全に運用されている証拠と見なされるべきで、解消が目指されるべきものではない。

本稿では、適用規準の不確実性を本質とする概念として心的概念に焦点を合わせてきたが、適用判断の一致を本質とする概念の本質については、詳述することができなかった。だが、世界のあり方を記述するために使われる、いわゆる「客観的」な概念は、適用判断におけるゆらぎを極力制御した設計がなされているように思われる²⁸。心的概念がその適用規準の不確実性を本質とし、判断の不一致に寛容の態度で応じられるゲームでしか使用されないこととあわせて考えるならば、「心」と「物」という対立はいずれかの概念にラディカルな用法の変更を施さない限りは一容易に乗り越えることのできない、非常に根源的な区別だとい

ことになるだろう²⁹。

参考文献

- [1] 荒畑靖宏「日常性への回帰と懐疑論への回帰—スタンリー・カヴェル—」齋藤元紀・増田靖彦編『21世紀の哲学をひらく：現代思想の最前線への招待』（ミネルヴァ書房、2016年）所収。
- [2] Bloor, D., *Wittgenstein: A Social Theory of Knowledge*, The Macmillan Press Ltd., 1983.『ウィトゲンシュタイン—知識の社会理論』（戸田山和久訳、勁草書房、1988年）
- [3] Cavell, S., *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy*, Oxford University Press, 1979.
- [4] Cerbone, D., "The Recovery of Indeterminacy in Merleau-Ponty and Wittgenstein," in K. R. Romluc (ed.), *Wittgenstein and Merleau-Ponty*, Routledge, 2017.
- [5] Darwin, C., *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, Cambridge University Press, 1872.『人及び動物の表情について』（浜中浜太郎訳、岩波文庫、1931年）
- [6] Davidson, D., *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press, 1980.『行為と出来事』（服部裕幸・柴田元良訳、勁草書房、1990年）
- [7] Douglas, M., "Self-Evidence," in *Implicit Meanings*, 252–83, Routledge, 1999.
- [8] 古田徹也「人間的自然とは何か—言語の習得をめぐるウィトゲンシュタインの考察から」『倫理学年報』55:

²⁹ 『心理学の哲学』の書評論文においてハッキングは、デカルトに並ぶ心身二元論者としてウィトゲンシュタインを評価している。「デカルトは、心と身体ははっきりと異なった実体であると考え、それらがどのように相互作用するのかを問題とした。この二元論と呼ばれる考え方は、西洋哲学に取り付き、それを支配してきた。だが、ウィトゲンシュタインは二元論者ではなかったのだから、彼とデカルトが似ているということなど根本的にありえない、と言われるかもしれない。だが、その考えには同意できない。私の考えでは、両者の対比は間違った仕方では理解されているのである。確かにウィトゲンシュタインは、心と身体は二つの「実体」であるとか、「心」がある特殊な事物を名指しているなどとは考えなかった。だが多くの本質的な点で、彼はデカルトとまったく同じくらい二元論者なのである。両者はともに、心理学は、自然科学で求められるものとは全く異なった記述の仕方や方法論を要求すると考えている。思惟についての考察は、空間的、機械論的な対象からなる非人間的世界に関する研究とは、これっぽっちも似ていないのである」(Hacking 2002, p.216)

²⁸ この点に関して、『確実性の問題』で論じられた「確実性」を「不一致の拒絶」を本質とするゲームという観点から分析・検討する必要がある。

- 113–27, 2006.
- [9] Gallie, W. B., “Essentially Contested Concepts,” *Proceedings of the Aristotelian Society* 56(1): 167–98, 1955.
- [10] Hacker, P. M. S., *Wittgenstein Meaning and Mind* Volume 3 Part I, John Wiley & Sons, 1993.
- [11] Hacking, I., “Wittgenstein as Philosophical Psychologist,” in *Historical Ontology*, 125–31, Harvard University Press, 2004. 『知の歴史学』(出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳, 岩波書店, 2012 年)
- [12] ter Hark, M., “‘Patterns of Life’: A Third Wittgenstein Concept,” in D. Moyal-Sharrock (ed.), *The Third Wittgenstein: The Post-Investigations Works*, 129–44, 2004.
- [13] ter Hark, M., “Uncertainty, Vagueness And Psychological Indeterminacy,” *Synthese* 124(2): 193–220, 2000.
- [14] ter Hark, M., “Wittgenstein and Dennett on Patterns,” in S. Schoreder (ed.), *Wittgenstein and Contemporary Philosophy of Mind*, 85–104, Palgrave Macmillan, 2001.
- [15] Hurley, S. L., *Natural Reasons: Personality and Polity*, Oxford University Press, 1989.
- [16] 伊藤克彦「本質的に論争的な概念をめぐる: コンセプトとコンセプションの区別の再考」『一橋法学』15(1): 423–74, 2016.
- [17] Lakatos, I., *Proofs and Refutations: The Logic of Mathematical Discovery*, Cambridge University Press, 1976. 『数学的発見の論理—証明と論駁』(佐々木力訳, 共立出版, 1980 年)
- [18] Loomis, E. J., “Criteria and Defeasibility: When Good Evidence Is Not Good Enough,” in D. Moyal-Sharrock (ed.), *Perspicuous Presentations: Essays on Wittgenstein’s Philosophy of Psychology*, 236–57, Palgrave-Macmillan, 2007.
- [19] Lycan, G., “Non-Inductive Evidence: Recent Work on Wittgenstein’s ‘Criteria,’” *American Philosophical Quarterly* 8(2): 109–25, 1971.
- [20] McDowell, J., “Criteria, Defeasibility and Knowledge,” in *Meaning, Knowledge, and Reality*, Harvard University Press, 1998.
- [21] McGinn, M., “The Everyday Alternative to Scepticism: Cavell and Wittgenstein on Other Minds,” in D. McManus (ed.), *Wittgenstein and Scepticism*, 240–59, Routledge, 2004.
- [22] McGinn, M., *The Routledge Guidebook to Wittgenstein’s Philosophical Investigations*, Routledge, 2013.
- [23] 野矢茂樹『語りえぬものを語る』(講談社, 2011 年)
- [24] 野矢茂樹『心と他者』(中央公論新社, 2012 年)
- [25] Rosat, J., “Patterns in the Weave of Life: Wittgenstein’s *Lebensmuster*,” in D. Moyal-Sharrock (ed.), *Perspicuous Presentations: Essays on Wittgenstein’s Philosophy of Psychology*, 194–210, Palgrave-Macmillan, 2007.
- [26] 佐藤弘明『レジデントのためのこれだけ心電図』(日本医事新報社, 2018 年)
- [27] 谷田雄毅「第3のウィトゲンシュタインにおける心理学の哲学: 振りをする概念の位置づけと物的/心的概念の区別をめぐる」『哲学雑誌』133: 131–47, 2019.
- [28] Tomassi, P., “Logic After Wittgenstein,” *Nordic Journal of Philosophical Logic* 6(1): 43–70, 2001.
- [29] Wittgenstein, L., *Remarks on the Philosophy of Psychology* Volume I, Wiley-Blackwell, 1980. 『ウィトゲンシュタイン全集 補巻 1 心理学の哲学 1』(佐藤徹郎訳, 大修館書店, 1985 年) (RPPI と略記)
- [30] Wittgenstein, L., *Remarks on the Philosophy of Psychology* Volume II, Wiley-Blackwell, 1980. 『ウィトゲンシュタイン全集 補巻 2 心理学の哲学 2』(野家啓一訳, 大修館書店, 1988 年) (RPPII と略記)
- [31] Wittgenstein, L., *Last Writings on the Philosophy of Psychology: Preliminary Studies for Part II of Philosophical Investigations* Volume I, Wiley-Blackwell, 1982. 『ラスト・ライティングス』(古田徹也訳, 講談社, 2016 年) (LWI と略記)
- [32] Wittgenstein, L., *On Certainty*, Wiley-Blackwell, 1991. 『ウィトゲンシュタイン全集 9 確実性の問題』(黒田亘訳, 大修館書店, 1975 年) (OC と略記)
- [33] Wittgenstein, L., *Remarks on the Foundation of Mathematics*, Wiley-Blackwell, 1991. 『ウィトゲンシュタイン全集 7 数学の基礎』(中村秀吉・藤田晋吾訳, 大修館書店, 1976 年) (RFM と略記)
- [34] Wittgenstein, L., *The Blue and Brown Books: Preliminary Studies for the “Philosophical Investigation.”*, Wiley-Blackwell, 1991. 『ウィトゲンシュタイン全集 6 青色本』(大森莊蔵訳, 大修館書店, 1975 年) (BB と略記)
- [35] Wittgenstein, L., *Last Writings on the Philosophy of Psychology: The Inner and the Outer* Volume II, Wiley-Blackwell, 1992. 『ラスト・ライティングス』(古田徹也訳, 講談社, 2016 年) (LWII と略記)
- [36] Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations*, Wiley-Blackwell, 2009. 『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』(藤本隆志訳, 大修館書店, 1976 年) (PI と略記)
- [37] Wright, C., “Anti-Realist Semantics: The Role

-
- of Criteria,” in G. Vesey (ed.), *Idealism Past and Present*, 225–48, Cambridge University Press, 1982.
- [38] Wright, C., “Realism, Truth-Value Links, Other Minds, and the Past,” in *Realism, Meaning and Truth*, 85–106, Blackwell, 1986.
- [39] 山田圭一「他人の心の知りえなさについて—ウィトゲンシュタイン最後の思索から」『倫理学年報』58: 203–16, 2009.
- (2020 年 1 月 7 日投稿、2020 年 11 月 3 日再投稿、2020 年 12 月 23 日掲載決定)